The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ラフカディオ・ハーンとボードレール
Author(s)	北村, 卓
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 33-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57377
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ラフカディオ・ハーンとボードレール[1]

北村　卓

はじめに

ラフカディオ・ハーン(小泉八雲 1850-1904)といえば、『怪談』の作者として、また海外への日本の紹介者として、あるいは英米文学の外国人教師として一般には認知されている。しかしながら、文学活動の出発点に立ったアメリカ時代に、ハーンはフランス文学に対してきわめて強い関心を抱いていたという事実を軽視してはならないだろう。実際、ハーンは新聞記者として、フランス文学に関する数多くの紹介文や批評、さらには翻訳を新聞紙上に発表しているのである。彼のジャーナリストとしての経歴は、1874 年、シンシナティの「シンシナティ・インクワイヤラー」紙 *Cincinnati Enquirer* に始まるが、このシンシナティ時代からすでにハーンは 1882 年刊行の『クレオパトラの夜』*One of Cleopatra's Nights* に収められることになるテオフィル・ゴーチエ(1811-72)の翻訳に手を染めている。ここからも、文学活動の端緒から翻訳を試みるほどのフランス語力とフランス文学への興味を持っていたことが窺い知れる。

そしてニューオリンズに居を移し、1878 年に「デイリー・シティ・アイテム」紙 *Daily City Item* に勤め、その後 1881 年に「タイムズ・デモクラット」紙 *Times-Democrat* の文芸部長に迎えられてから、ハーンのフランス文学への関心はさらに強まった。ハーンは 19 世紀前半から中葉にかけて、ヴィクトル・ユゴー(1802-85)など、従来の古典主義を打ち破り、新たな文学・芸術思潮となるロマン主義を牽引した作家たちのみならず、19 世紀半ば頃、小ロマン派とも呼ばれるグループに属したゴーチエやジェラール・ド・ネルヴァル(1808-55)、その同時代の詩人シャルル・ボードレール(1821-67)や小説家ギュスターヴ・フローベール(1821-80)、さらにはエミール・ゾラ(1840-1902)、ピエール・ロチ(1850-1923)らにも強い関心を寄せていた。

ハーンにおけるフランス文学の受容一般について明らかにするためには、これまで刊行されているハーンの作品だけではなく、アメリカ時代に新聞に書いた記事の中でいまだ日

---

[1]本論は、2016 年 2 月 13 日～14 日、富山大学学長裁量経費採択事業として、富山大学ヘルン(小泉八雲)研究会が主催した国際シンポジウム「ラフカディオ・ハーン研究への新たな視点」« Nouvelles perspectives pour les recherches sur Lafcadio Hearn » における筆者の発表「ボードレール・ハーン・谷崎—理想の女性をめぐって」をもとにしている。発表の内容は近刊の報告書に掲載される予定だが、本稿では、報告書では割愛した箇所を補いながら、ハーンにおけるボードレールの受容に焦点を絞り、論を再構築している。なお、本稿は日本学術振興会科学研究費助成基金の助成を得て行われた研究成果の一部である(基盤研究(C)課題番号 15K02456)。

の目を見ていない多くの文献に光を当てなければならない[2]。本稿で取り上げるボードレールの散文詩の翻訳についても、1980 年代にヴァンダービルト大学の W.T.バンディ教授によって新たに 4 篇の存在が知らしめられたが、その全体像はいまだはっきり捉えられてはいない。しかしながら、ハーンがその文学創造の端緒から成熟へと至る過程において、いかにボードレールやゴーチエをはじめとするフランス文学を吸収し、何をそこから引き出したのかを解明することは、ハーン文学の本質と密接に関わると同時に、ハーンが同時代および後世の日本人作家に与えた影響を考える際にも重要な指標となり得るだろう。

本稿では、現在入手できる資料をもとにしつつ、現時点で明らかとなったハーンのボードレール受容の過程を示したい。

ハーンにおけるボードレール受容の展開

1) プレリュード

バンディは、ハーンのボードレールへの関心がポーを介して生まれたと推測し、その証左を 1874 年 10 月 14 日付「インクワイヤラー」紙掲載の一文に求めている[3]。「グロテスクでアラベスクな趣味」を持ち、「フランス戦慄派」を崇拝するハーンの自画像ともいえる文章である。しかしここにはボードレールの名は明示されていない。ボードレールの名が最初に現われるのは、バンディも指摘するように、おそらくシンシナティからニューオリンズに移り、「アイテム」紙に書いた「匂いの主題」“An Odorous Subject”と題した文章(1878 年 8 月 12 日付)であろう。ここでは、ロマン主義的な精神を持つ詩人たちが女性の匂い／芳香を讃えている例としてボードレールの名が挙げられ、散文詩「髪の中の半球」« Un hémisphère dans une chevelure »の一節が原文で引用された後、かなりの部分が英語に翻訳されている。以下に該当箇所の一部を引用する。なおこの記事は、これまでハーンの著作として刊行された文献の中では紹介されてこなかったものである。

> Baudelaire possessed an abnormally delicate sense of smell. “*Mon âme*”, he cries, “*voltige sur les parfums comme l'âme des autres hommes voltige sur la musique.*” (My soul soars upon perfume as the souls of other men soar upon music.) He praised the perfume of his mistress's hair – “hair smelling of the South”, as Swinburne would say – more than aught else. Let me quote a few of his lyricisms: “From her elastic and heavy locks, a living coffer of perfume, a censer of the nuptial chamber,

---

[2] ハーンの蔵書を集めた富山大学の「ヘルン文庫」にはフランス文学に関係する文献が多く収められている。現在、富山大学の中島淑惠教授を中心に行われている文献調査は、こうした研究に貴重な貢献をもたらすものと期待される。

[3] 1981 年 4 月に W.T. Bandy が日本で行った講演において指摘されたが、まことに残念ながら、現在その講演原稿の所在は不明である。しかし、その講演の日本語訳が「ハーンとボードレール—アメリカ時代のハーン」として、 池田雅之氏の著書『想像力の比較文学』(成文堂、1999)に収録されている(pp.335-339)。本稿執筆にあたってはこれを参照させていただいた。

exhales a sweet, wild, savage smell; and a perfume as of fur from the muslin and velvet robes impregnated with the spirit of her pure youthfulness. (…)[4]

まずここで注目すべきは、ハーンが引用しているフランス語の詩句は正確ではない、という点である。ボードレールの原文では、« Mon âme voyage sur le parfum comme l'âme des autres hommes sur la musique. »[5]「私の魂は香りに乗って旅をする、ほかの人たちの魂が音楽に乗って旅するように」とあるが、ハーンが引用したフランス語の一節では、動詞が « voyage(voyager) »「旅をする」から« voltige(voltiger) »「飛び舞う」へと換えられている。これはどういうことなのか？まずこの詩句は、バンヴィルが『パリのカメオ』*Les Camées parisiens* (1866-73)の中でボードレールのプロフィールを描く際に、誤って書いたものである。このバンヴィルのテクストを座右に置いていた可能性もなくはないが、ハーンが手にしていたに違いないミシェル・レヴィ版の「ボードレール全集」第 1 巻の『悪の華』*Les Fleurs du mal* (初版は 1868)に付されたテオフィル・ゴーチエの序文が原因であろうと考えられる。ゴーチエはこの序文の中で、この詩句が含まれたバンヴィルの文章をそのまま引用しているのである[6]。ハーンがここで試みている「髪の中の半球」の翻訳は、先の「ボードレール全集」の第 4 巻『小散文詩―人工楽園』*Petits poëmes en prose –Les Paradis artificiels* (初版は 1869)に拠って行われているはずなので、奇妙な事態ではあるのだが、ゴーチエの序文をハーンが深く読み込んでいたことを証し立てているのではないだろうか[7]。

第二に留意すべきは、ハーンのボードレールへの関心が、女性、しかも黒人の女性の髪の匂いに端を発している点である。この散文詩は、ボードレールの愛人であった混血の女性、黒い髪と褐色の肌をした女優ジャンヌ・デュヴァルに想を得て書かれたものである。シンシナティ時代、ハーンが法に反し、結婚までした混血の女性アルシア・フォーリーのイメージをボードレールのこの詩の中に想起したと考えることもできるだろう。

次に、1878 年 9 月 15 日付「アイテム」紙に掲載された「阿片の吸引」"Opium Eating" と題した記事で、ハーンはボードレールの韻文詩「毒」« Le Poison » の一節を原文で引用し、またそれを英語に訳して、阿片による逸楽を論じている[8]。ただし、その目的は、ジャーナリストとして当時広まりつつあった阿片や麻薬の摂取に警鐘を鳴らすためである。し

---

[4] 現在オリジナルテクストを入手できないが、この記事は以下の論考の中に採録されている：Tinker, E.L.: "Lafcadio Hearn and the Sense of Smell", *The Bookman*, January 1924. 本稿ではここから再引用した。

[5] *Œuvre complète de Baudelaire*, tome 1, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1975, p.300.

[6] *Baudelaire par Théophile Gautier*, présentation et notes critiques par Claude-Marie Senninger, avec la collaboration de Lois Cassandra Hamrick, Klincksieck,1986, p.115.

[7] ハーンの蔵書を収めた富山大学の「ヘルン文庫」の目録には、『悪の華』は 1898 年版しかない。おそらくアメリカで購入したものが散逸し、日本で再び買い求めたと考えられる。『小散文詩―人工楽園』については 1873 年の第 2 版が所蔵されており、これを読んでいたことは確実である。

[8] Hearn, Lafcadio: *The New Radiance and Other Scientific Sketches*, ed. By Ichiro Nishizaki, Hokuseido Press, 1939, pp.108-110.

かしながら、麻薬の危険性を説くのに、ボードレールの詩を引用する必要があるだろうか。おそらくハーンの意図は、高い芸術的なレベルで陶酔を描く優れた作品を示すことで、現実世界における麻薬中毒の悲惨な実態を際立たせることにあったと考えられる。

そして 1879 年 10 月 22 日には、「アイテム」紙に「エドガー・ポーの仏訳」"A French Translation of Edgar Poe" を寄せ、ボードレールによるポーの翻訳について、両者の精神的な近親性をまず指摘し、ボードレールのフランス語訳を称賛したうえで、翻訳の問題点を細かく論じている[9]。

なお、バンディによれば、1880 年 8 月 28 日付「フィガロ紙」に掲載された記事をもとにして、ハーンは 1880 年 9 月 26 日、「デイリー・デモクラット」紙 *Daily Democra*(翌年「タイムズ・デモクラット」紙になる)に、ボードレールの不確実な逸話を紹介しているというが、8 月 28 日付「フィガロ」紙を実際に調べてもそのような記事はない。1880 年に発行された「フィガロ」紙の記事の中でハーンが参照した可能性があるのは、8 月 30 日付の同紙と推測される。そこには、オクターブ・ユザンヌ Octave Uzanne の署名がある「未刊のボードレール」« Baudelaire inédit »と題した長文の記事が掲載されている。この文章は、翌日の 8 月 31 日がボードレールの命日にあたるため、特別に書かれたものであり、ボードレールの『内面の日記』*Journaux intimes* を構成する『火箭』*Fusées* と『赤裸の心』*Mon cœur mis à nu* の存在を初めて世に示した貴重な論考でもある。書誌研究家であり作家、ジャーナリストでもあったオクターヴ・ユザンヌ(1851-1931)は愛書家としても知られ、多くの文学者と交流を持った人物であって、その後ボードレールに関する文章をいくつも残している。ハーンははたしてこのユザンヌが書いた記事を実際に読んだのであろうか。その後のハーンのボードレール理解を考えたとき、大きな疑問が残る。ハーンが依拠したのは「フィガロ」紙ではなかった可能性も考えなければならない。いずれにせよ、今後、当時フランスで刊行された新聞や雑誌、および 1880 年 9 月 26 日付の「デモクラット」紙の内容を精査する必要がある。

2) 1881.4.21.「春の幻影」"Spring Fantoms"

現在参照できるハーンのテクストの中で、最初にボードレールの作品への本格的な言及が現れるのは、1881 年 4 月 21 日付「アイテム」*Item* 紙に掲載の「春の幻影」"Spring Fantoms"と題したエッセーにおいてである。以下にその冒頭部を引用する。

> The moon, descending her staircase of clouds in one of the "Petits Poèmes en Prose," enters the chamber of a newborn child, and whispers into his dreams: "Thou shalt love all that loves me—the water that is formless and multiform, the vast green sea, the place where thou shalt never be, the woman thou shalt never

[9] 以下の版を参照した。Hearn, Lafcadio: *Editorials*, Edition of Houghton Mifflin Co., Boston, 1926, pp.63-69.

know."[10]

作品名こそ記されていないが、一般に『パリの憂鬱』*Spleen de Paris* とも称されるボードレールの散文詩集 *Petits poèmes en prose*（『小散文詩』）のタイトルがフランス語で引用され、その一篇「月の恵み」« Les Bienfaits de la lune » の一部が冒頭部で紹介されている。そこに現われる「おまえが決して識ることのないであろう女性」"the woman thou shalt never know"、すなわち、この世には存在しない理想の女性のテーマをめぐるハーンの想いが、続く文章の中に綴られている。ここで注目すべきは、まずハーンにおけるボードレールへの関心が、散文詩「月の恵み」に端を発していること、およびハーンがこの作品の中に「理想／永遠の女性」の主題を読み取っていることである[11]。この散文詩およびそのテーマは、終生ハーンを捉え、ハーンの著述の中にもさまざまな形を取って生き続けたのではないかと考えられる。

次に注意を喚起したいのは、ハーンがこの散文詩を紹介するにあたって、一箇所変更を加えている点である。それは、月の女神が愛し。自らの刻印を与えようとしている赤ん坊の「性」に他ならない。ボードレールの原文では、この赤ん坊は女の子である。つまり、月に愛された女の子は、月が愛するものすべてを愛し、月を愛する存在が愛するものすべてを愛する女性となる[12]。ところがハーンはこの赤子を男の子としているのである(The moon… whispers into his dreams)。これによりこの男の子はまさに「月の女神に愛される／月の女神を愛する」存在となり、「理想の女性」と「それを愛する／それに愛される男」との枠組みが構築される[13]。このように、「おまえが決して識ることのないであろう女性」の「おまえ」"Thou" は、ハーンによって女性から男性へと転換されているのである。この改変は、おそらく「理想の女性」とそれを求めるハーン自身との関係を築くために、意図的に行ったものと考えられるが、これについては後にも触れる。

3) 1882.3.12.　「月の恵み」"The Moon's Blessing"

さてハーンは、「春の幻影」を書いたおよそ 1 年後、「タイムズ・デモクラット」紙 *Times-Democrat*(1882 年 3 月 12 日)に、「月の恵み」« Les Bienfaits de la lune » を "The Moon's Blessing" と題してその全訳を発表する。「月の恵み」への興味が持続し、さらに深まっていることがみて取れよう。この翻訳は、ハーンの思い入れが反映した箇所もあるが、概ね

---

[10] *Stray Leaves from Strange Literature and Fantastics and Other Fancies,* (*The Writings of Lafcadio Hearn, II*), Edition of Houghton Mifflin Co., Boston, 1922, p.312. 下線強調は筆者による。

[11] 牧野陽子氏は、ボードレールの「月の恵み」がハーンの「雪女」の重要な発想源の一つであることを説得的に論じている(「「雪女」—世紀末"宿命の女"の変容」、平川祐弘編『小泉八雲　回想と研究』、講談社学術文庫、1992)。

[12] *Œuvre complète de Baudelaire*, tome 1, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1975, p.341.

[13] 平井呈一の訳では、「おまえは、おれを愛してくれるものは何でも愛さなければならないよ」(「春の妄想」: 小泉八雲『飛花落葉集他』、平井呈一訳、恒文社、1976、p.348.)と、発話者の月を男性(「おれ」)として捉えている。赤子が男の子であるため、このような訳となったのだろうが、月は女神であり、当然のことながら女性でなければならない。

忠実になされている。以下に、「春の幻影」の冒頭部にほぼ相当する箇所を引いておく。

> "Thou shalt love all that I love and all that loves me：—waters and clouds, silence and the night；the vast green sea, the water that is formless and multiform；the place where thou shalt never be；the lover thou shalt never know…"[14]

見ての通り、「春の幻影」における意図的な「性」の変更はここには見られない。「おまえが決して識ることのないであろう」存在は、「女性」woman ではなく「(男性の)恋人」lover となっている。さらに、ハーンの講義録に収められた翻訳のように、最終節が略されてもいないのだが、この問題については、後に改めて検討する。

4) 1883.4.15.「偉大なる奇人の偶像」"The Idol of a Great Eccentric"

続いて、1 年余り後の 1883 年 4 月 15 日、ハーンは同じく「タイムズ・デモクラット」紙上に、"The Idol of a Great Eccentric"(「偉大なる奇人の偶像」)[15] と題するボードレールの紹介文を掲載する。これはボードレールの死後刊行された全集の第 1 巻(『悪の華』)に収録されたテオフィル・ゴーチエによるボードレール論を下敷きとし、さらにゴーチエの『ロマン主義の歴史』*Histoire du romantisme*(1874)やバンヴィルの『わが回想』*Mes souvenirs*(1882)も参照するなど[16]、当時ハーンが本格的にボードレールの作品に取り組もうとしていたことが分かる。

この文章において、『悪の華』からは初版(1857)刊行の直後、司直によって削除を命じられた「吸血鬼の変身」« Métamorphoses du Vampire[17]»を始め,「腐屍」« Une Charogne »,「殉教の女」« Une Martyre », 「マルバール生まれの女に」« À une Malabaraise », 「サレド女ハ飽キ足ラズ」« Sed non satiata », 「午後の唄(シャンソン)」« Chanson d'après-midi »,「幽霊」« Le Revenant »といった作品が言及されている。そして散文詩では、「麗しのドロテ」« La Belle Dorothée »と「髪の中の半球」"A Hemisphere in a Woman's Hair" が取り上げられている。「髪の中の半球」だけが英語でタイトルが記されているのは、先の「匂いの主題」(1878 年 8 月 12 日付「アイテム」紙)とも関連して、ハーンの関心を最も惹きつけた作品であること、そして数か月後に掲載される翻訳が進んでいたことが反映していると考えられる。さて、この文章を通して、一貫してハーンが強調しているのは、ボードレールにとっての黒いヴィーナス、ジャンヌ・デュヴァルの存在と魅力に他ならない。

---

[14] この箇所は、Beongcheon Yu ベンチョン・ユー氏が自著 *An Ape of Gods*『神々の猿』に転載したテクストより引用している。(Wayne State University Press, 1964／池田雅之監訳、恒文社、1992、p.33)。

[15] *Essays in European and Oriental Literature,* ed. by A. Mordell, New York, Dodd, Mead and Company, 1923.

[16] 『ロマン主義の歴史』と『わが回想』の原著はいずれもヘルン文庫にある。

[17] 正しくは« Les Métamorphoses du Vampire »だが、ここではハーンの記述をそのまま採録している。

そもそも「偉大なる奇人の偶像」の「偶像」とは、まさにこのジャンヌ・デュヴァルを指しているのである。

5) 1883.12.31.「ボードレールの断篇」

そして 1883 年 12 月 31 日には、「タイムズ・デモクラット」紙に「ボードレールの断篇」と冠して以下のボードレールの散文詩 4 篇の翻訳が掲載される。

「髪の中の半球」 “A Hemisphere in a Woman’s Hair”
(« Un hémisphère dans une chevelure »)
「時計」 “The Clock” (« L’Horloge »)
「道化とウェヌス（美神)」 “The Fool and Venus” (« Le Fou et la Vénus »)
「異邦人」 “The Stranger” (« L’Étranger »)

この翻訳の存在については、1981 年 4 月に W.T. バンディが日本で行った講演において初めて明らかにしたのだが、現在その講演原稿の所在が不明のため、詳細は分からない。しかし、先にも触れたようにその講演の日本語訳が、「ハーンとボードレール—アメリカ時代のハーン」として、 池田雅之氏の著書『想像力の比較文学』(成文堂、1999)に収録されている。バンディによれば、これは匿名の記事であったという。

さて、1914 年に Ch.W.ハトソンは、先の「春の幻影」などの文章を集め、『きまぐれ草』 *Fantastics and Other Fancies* として刊行するのだが、ハトソン自らがその序文に付した注釈に興味深い記述がある。すなわち、ハーン自身が書いた『きまぐれ草』の覚書の中に含まれながら、ハトソンが探し得なかった 4 篇の作品タイトル名がそこに記されているのである。そしてその 4 篇とはまさにこれらの散文詩であることも、併せてバンディによって明らかにされた。匿名の記事であるがゆえに、ハトソンは見つけることができなかったのであろう。

当該の「タイムズ・デモクラット」紙をいまだ入手できないため、翻訳についての細かい分析はかなわないが、50 篇あるボードレールの散文詩の中から選ばれたこの 4 篇に、ハーンの嗜好が色濃く反映していると考えて差し支えないだろう。まず「髪の中の半球」は言うまでもなく「月の恵み」と並んでハーンが最も好んだ散文詩であり、恋人の黒い髪の匂い、イメージによって楽園が喚起される。次の「時計」では、語り手は恋人の眼の中に永遠の時を見る。「道化とウェヌス」では、美の女神像にひれ伏す道化＝芸術家の構図が象徴的に提示されている。そして「異邦人」は、現実には存在しない永遠の美(女)しか愛さない孤高の存在＝詩人の自画像に他ならない。

6) 1895「永遠に女性的なるもの」“Of the Eternal Feminine”

さて、1890 年に来日した後、ハーンが最初にボードレールに言及するのは、1895 年に

刊行された「永遠に女性的なるもの」 “Of the Eternal Feminine”[18]というエッセーにおいてある。ハーンは、そもそも東洋には西洋におけるような女性崇拝はないとしながら、西洋人が自らの理想に対して抱き得るかもしれない疑念をめぐって、次のように書いている。

> (…) Whether his doubts be final is another matter: they will be at least rational enough and powerful enough to modify permanently some of his prior convictions — among others his conviction of the moral value of the Western worship of Woman as the ideal of “*la femme que tu ne connaîtras pas*,”[1] — the ideal of the Eternal Feminine. For in this ancient East the Eternal Feminine does not exist at all
>
> [1] A phrase from Baudelaire[19]

ここで「おまえの識ることのないであろう女性」というフランス語をイタリック体で引用し、それにわざわざ注を付して「ボードレールからの一節」としている。先に言及した「春の幻影」(1881)におけるのと同様に、この箇所も「月の恵み」から採られたものであり、しかも、月が囁きかける相手の赤ん坊は、ここでも女性から男性へと「性」を変えられている。ちなみにボードレールの原文では、当該の箇所は “l’amant que tu ne connaîtras pas” すなわち「おまえ(女の子)が識ることのないであろう恋人(男性)」である[20]。先にも述べたように、ハーンは自身が行った翻訳(1882 年 3 月)、および後に帝大で行った講義ではこの箇所を原文通りに訳しているのであるから、これはやはり意識的な改変と見るべきであろう。その意図は、おそらく「理想／永遠の女性」とそれを追い求める「男＝自分自身」という構図こそが、西洋の文化を特徴づけるものであることを示すためであったと考えられる。

そして、タイトルに含まれる“the Eternal Feminine”の由来はゲーテにある、と一般には考えられているが、さりげなく注に置かれたボードレールの名によって、この語が実はボードレールと深く結びついていることが暗示されている。テオフィル・ゴーチエが書いた『悪の華』の序文の中に« l’éternel féminin » の語は見いだされるし[21]、そもそもボードレール自身が、1862 年に女流詩人マルスリーヌ・デボルド＝ヴァルモールを論じた批評(*Réflexion sur quelques-uns de mes contemporains*, « III. Marceline Desbordes-Valmore »)の中でこの表現を用いているのである[22]。ハーン自身がこの批評を読んでいた可能性もないではないが、少々無理がある。一方、ゴーチエがこのデボルド＝ヴァルモー

---

[18] 以下の書物に収録され、出版された。*Out of the East: Reveries and Studies in New Japan,* Boston and New York, Houghton Mifflin and Company), 1895.
[19] この引用は以下の版に拠った。*Out of the East and Kokoro*, *The Writings of Lafcadio Hearn*, *VII*, Edition of Houghton Mifflin Co., Boston, 1922, p.80.
[20] 注 10 を参照。
[21] *Baudelaire par Théophile Gautier*, présentation et notes critiques par Claude-Marie Senninger, avec la collaboration de Lois Cassandra Hamrick, Klincksieck,1986, p.137.
[22] *Œuvre complète de Baudelaire*, tome 2, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1976, p.147.

ル論を踏まえた上で、ボードレールを論じる際に« l'éternel féminin »を意識的に用い、そしてハーンがそれを読み、記憶に留めた可能性はきわめて高い。

7) 1896-1903「ボードレール」"Baudelaire"

最後にハーンがボードレールに触れるのは、1896 年から 1903 年まで東京帝国大学で行った講義の一つにおいてである。田部隆次らが残した筆記ノートを元に編纂された講義録『文学の解釈』第 2 巻では、散文芸術を扱った第 4 章、"Studies of Extraordinary Prose"の「ボードレール」(Baudelaire)の項において、ボードレールの散文詩が有する優れた詩的表現力が、ハーン自身が翻訳した「月の恵み」を例に論じられている[23]。このときのタイトルは 1882 年の"The Moon's Blessing"ではなく、"The Gifts of the Moon"とされ、また訳文も全篇にわたって書き変えられており、推敲を重ねた後が見てとれる。ハーンが生涯を通して、いかにボードレールおよび散文詩「月の恵み」に関心を持ち続けていたかが、ここからも読み取れるだろう。

さらに、この講義録の「月の恵み」には、原文の最終節が欠けている[24]。講義という性格上、何らかの事情で、あるいは無意識に省略されてしまった可能性もあるが、几帳面なハーンの気質を鑑みれば、やはりそこに何らかの意図があったと考える方が自然であろう。この削除された箇所を、1882 年 3 月 12 日、"The Moon's Blessing"と題して「タイムズ・デモクラット」紙に掲載されたハーン自身の翻訳から以下に引く。

> And therefore, hath it come to pass, thou dear accursed spoiled-child, that I am now lying at thy feet, seeking to find in all thy person some reflection of the awful Divinity, of the fatidical godmother, of that poison-giving nurse who nurseth all *lunatics*.[25]

この最終節でボードレールは、夢から現実への覚醒を描いている。すなわち、夢幻的な情景から一転して現実の女の中に理想を求めようとする男(＝語り手)の言葉と存在が前面に出て幕が閉じられるのである。そもそもハーンはこの講義で、ボードレールの散文詩がいかに夢や夢想、幻想を完璧なまでに表現し得ているかを論じているのだから、夢から現実へと引き戻される最終節を意識的に排除したとしても不思議ではない。ボードレールの散文詩(とりわけ 1862 以降に書かれた詩篇の多く)では、こうした夢からの覚醒、すなわち「幻滅」"désillusion"が重要なテーマとなっている。したがって、この最終節を削るという決断は、ハーン独特のボードレール解釈から必然的にもたらされたともいえる。その背

---

[23] *Interpretations of Literature, II,* ed. by J. Erskine, New York, Dodd, Mead and Company, 1915.
[24] 邦訳の『ラフカディオ・ハーン著作集 第 7 巻』(恒文社、1985)では、三好達治よる全訳が、最終節も含めそのまま転載されている。
[25] ベンチョン・ユー『神々の猿』池田雅之監訳、恒文社、1992、p.34.

後には、ハーンにおける「理想／永遠の女性」への憧憬とその独自の文学的主題化が潜んでいると考えられる。

おわりに

ハーンにおけるボードレールの受容において特筆すべきは、「髪の中の半球」と「月の恵み」の重要性である。前者はアメリカ時代にきわめて強いインパクトをハーンに与えたが、渡日してからはその影が薄まり、消えてしまったかのようにみえる。一方「月の恵み」は最晩年までハーンの意識を捉えて離さない。前者が喚起するのは、黒髪で褐色の女性に導かれる暑い南国の楽園であり、後者は冷たく青白い月である。一見したところ、対照的なイメージなのだが、実は両者はハーンの中で分かち難く結びついていたのではなかっただろうか。こうした観点からいま一度ハーンの作品を読み解いていくことが、残された課題の一つである。

さらに、とりわけ戦前、英語で書かれたハーンの著作は、当時の文学者や知識人の間で広く読まれていた。これまで見過ごされてきた点だが、ハーンを介して西欧の文学が日本に受容された側面も大いにあり得る。今後は、日本におけるボードレールやゴーチエなどのフランス文学の受容を論じる際にも、ハーンの著作が果たした役割を十分に考慮に入れていく必要があるだろう。